

研究課題 (テーマ)	新教育プログラム開発・試行・実施支援 「年次を超えて学生同士が教え合い学びあう教育の試行 (継続)」		
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	知能デザイン工学科	教授	野村 俊
		教授	高木 昇
		准教授	岩井 学
研究結果の概要			
<p>1. 実施内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・よろずレポート相談所を開設し、大学院生(M1)と学部生(B4)が相談員となって、実験、演習、講義のレポートを下級生に指導した。学生同士が教え合い学び合うことで、下級生はレポートの質や理解度を、相談員は指導能力や論文執筆能力を向上できると期待した。本年度は3年次の学生実験の報告書を重視し、教員に提出する前に相談員に添削を受けることを義務付けた。 ・前期は23回実施した。添削科目は、知能デザイン工学概論(B1)、コンピュータ工学(B2)、パターン情報処理(B2)、知能デザイン工学実験1(B3)であった。添削数は650件、相談員の延べ人数は211人だった。後期は22回実施した。科目は企業経営概論(B3)、知能デザイン工学実験2(B3)、添削数は300件、相談員の延べ人数は156人だった。 <p>2. 教育改善効果</p> <p>2.1 知能デザイン工学実験(B3)の実験報告書における効果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・約60%の学生が役に立ったと答えた。役立った点として、誤字や図表のミスを指摘してもらったことを上げていた。不満として、相談員と教員でチェック基準が異なっていることをあげる学生が多かった。次年度の継続を望むのは約50%だった。 ・相談員については、自己の学力向上に寄与し、論文作成のための勉強になったと約90%が回答した。的確に修正内容を指摘できたと思った相談員は約70%だった。次年度も相談員を継続したいと55%が回答した。自身の成長については、レポートの体裁が分かるようになったという初歩的なものから、読みにくい報告書をチェックし、分かり易い文章を書くにはどうすれば良いか考えるようになったという高等なものまであった。 ・教員からはレポートの体裁が整ったおかげで細かな指摘をしなくてよくなり、内容を指導できるようになったことが上げられていた。成績中位の学生で同じ誤りをしないようになった印象を受けた。相談員に対しては、大学院生は成長が見られたが、学部生は成長が判断できない程度であったと判断されていた。 <p>2.2 その他の講義レポートにおける改善効果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生や2年生では、60%以上の学生がレポートの添削が役立っていたと回答した。 			
今後の展開			
<ul style="list-style-type: none"> ・学生と相談員の相互にメリットがあったこと、過半数が継続を望んでいたことから、次年度もよろずレポート相談所を継続したい。 ・学生からの要望として、相談員のスキルや態度の改善、実施日の拡充、相談員と実験担当教員との連携が上げられていた。教員の要望として、目標の明確化、学生のレベルに応じた対応、相談員の確保が上げられていた。これらに対応したい。 ・1, 2年生のレポートは体裁を良くすること目標とする。3年生の学生実験は本年度と同様に教員が相談員に対しチェックすべき内容を指導するようにする。 			